
ラヴィング

むぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラヴィング

【Zコード】

N7154X

【作者名】

むぎ

【あらすじ】

過去の罪滅ぼしのため、神官になろうと神学校に通うレオン・マグダラス。ルームメイトであり親友のジーク・フォンフィリアと張り合いのある毎日を送っていた。

ある雨の日、レオンは中庭の物音に気付き、倒れていた少女を匿う。少女・アイネは言葉が通じず、現代では誰も使えない黒い呪文を操つた。直後、大司教がレオンの部屋を訪ね、アイネを連れ去ろうとする。

大司教の手から逃れ、神学校から逃亡した三人は、いつしか、アイ

ネを巡る計画に巻き込まれていく……。

2008年頃書いたものです。

pixivに掲載予定、自サイトに掲載済みです。

偉大なる創造主力タリナ 汝の慈悲深い愛で、我等を守り給え
我等を悲しみから救い給え 我等の栄えはいつも 汝と共にあら
んことを

1

雨が降っている。窓硝子にゆっくりと水滴の線が走る。窓の外には庭がある。濃い緑の葉をつけた木々があり、白い薔薇が咲いている。薔薇は、園丁のおじいさんが丁寧に世話をしているのをじこからよく見かけていた。

窓硝子に、黒い髪と白い肌と薄い青色の目が映っている。前髪が目にかかる邪魔なので、そろそろ切りに行きたい。

耳を澄ますと、弱い雨だれの音と、衣擦れの音しか聞こえない。日曜礼拝の後の、安息日の弛緩した空気を幸せというのかもしけないと、最近思うようになった。

足音が聞こえてくる。俺はこの部屋に一つしかない扉を振り返る。扉を開けて現れた赤毛の青年は、トレイにカップとソーサー、ポット、ミルクポットと砂糖瓶を乗せていた。茶色い目が、俺を見て笑つた。

「またセンチメンタル？」

「別に、そういう訳じゃない」

赤毛の青年、ジーラ・フォンフイリアはトレイの上の一式を、窓際に近い俺の机の上へ置いた。

十八歳で全寮制の神学校に入学して四年がたつが、一年前、ジークは一人部屋生活を満喫していた俺の部屋の半分を奪い取った。そんな部屋を半分奪い取った憎いやつは、なぜか今は俺の親友になつていて。向こうがどう思つていてるか知らないが、少なくとも俺はジ

ークを気に入っている。

ジークは自分の椅子を引いてきて、俺の机の上で紅茶を注いでいた。いい香りが湯気と共に広がる。

「今日はケーキもえなかつた。残念」

ジークは心底残念そうな顔で言つた。

「太るぞ。毎週食べてたら」

「でもケーキのないお茶会なんて、お茶会じゃない」

ジークの手元には既にミルクティーができあがつていた。授業のない日曜日は、紅茶を飲みながらぼんやりするのが、この部屋の習慣になつていた。俺も砂糖を入れないミルクティーを作つて、一口飲む。湯気が立ち上つて見ているのを見つめると、妙に落ち着く。

「何見てんの？」

ジークが俺の手をのぞきこんでくる。

「いや、平和だなと思って」

「嵐の前の静けさってやつだろ。そろそろきな臭い話が聞こえてくるよ」

ジークは窓の外を見た。隣国との休戦協定の期限が迫つているからだろう。隣国は小さなこの国を自国の領土に加えようと、五十年前から侵略戦争を繰り返している。休戦協定が結ばれて、今年で丁度十年だ。休戦になつた理由は分からぬが、そろそろ戦争が始まるのは確実だ。世間に疎いこの場所にいても、開戦が近付いてくる気配は何となく分かつた。

「まあ数カ月後の心配より、一週間先の心配をしないとな」

ジークは俺の机の上の教科書を勝手に開く。そうなのだった。定期考査一週間前なのだ。一気に気分が重くなる。

「俺は実技で点稼ぐから、いい」

教科書から手をそらす。

「そんなこと言つて、どうせちゃんと勉強するんだろ。というか、実技でカバーできる程実技の比重ないぞ」

厳しつつこみが入る。確かに実技の比重はそんなに高くない。

一応、勉強も嫌々ながらするつもりだ。神学校に入った目的を忘れる訳にはいかない。

「実技って今回、何？」

ジークは教科書を見ながら言つ。

「生徒同士のサドンデス」

ジークは遠くを見るように茶色い目を細めた。

「ああ。レオン勝ちそうだな」

実技は魔法のみを使用した生徒同士のトーナメント戦だ。と、さつき廊下で会つた司祭に聞いた。武器は使えないし、肉弾戦も駄目だが、魔法でなら何をしてもいいらしい。武器を作り出してもいい。もつとも、現代でそんなことができる人間は一人もいないけれど。神官レベルなら基本属性の攻撃呪文が扱える程度だ。つまり、体さばきと攻撃呪文での勝負になる。

勝つ自信はある。なぜか俺は現代人の中では魔術師レベルの魔法センスがあるらしい。魔術師協会から勧誘が来たこともあったが、断つた。俺がなりたいのは魔術師ではなく神官なのだ。

「まあ実技はレオンにまかせておいて、と」

教科書に目を落としたままのジークの横顔を見る。耳に琥珀色の小さなピアスが見えた。

目の前には俺と同じくらいの体格の男が立つてゐる。間合は約三メートル。クラスメイトだが、名前は忘れた。というか覚える気がないので覚えていない。茶髪で、割とクラスの中心的存在だったような気がする。気がするが、俺の情報は我ながら当てにならないので、実は違うかもしれない。

俺達を囲むように、クラスメイトと司祭が立つてゐる。その間には玉虫色の半透明の壁がある。魔法が暴発した際に備えた防御壁だ。小雨が振り出していた。運動場は屋根がなく、ただの広場なので大雨になつたら面倒だ。男が口を開く。

「お前と戦えて嬉しいよ。前回は決勝まで進めなかつたから

俺は曖昧に返事をした。前回のことなど覚えていない。数秒後には始まる勝負へ向けて、右手を握つて、開く。

「始め」

司祭の声がはつきりと響いた。男も俺も動かない。

『透の空中 風 塵』

俺は古代語の呪文を紡ぐ。男は動いたが、呪文の方が速い。

『以つて我が手に巻き起これ アリス』

男の足元に向けて撃つた。力の流れが右手に集まつて、抜けていく感覚が分かる。撃つてから、今日は地面が濡れているから、あまり目くらましの効果がなかつたことに気付く。

『透の空気 雷 塵』

男は顔をかばいながら言う。やはり雨だから、そう来るのが賢いだろう。男の手の向いた方から横に跳ぶ。

『以つて我が手に进れ ワプラ』

『透の水面 水 気 以つて我が手に溢れ出せ オスター』

感電の嫌な音に、防御壁の向こうのクラスマイト達がざわめく。男は顔をかばいながら、逃げた俺の方をしつかり狙つていた。呪文が間に合わなくて相殺できていなかつたら危なかつた。早口の練習はしておくものだ。名前は分からぬが、中々強い。

「早口だな」

「練習したからな」

男は笑つた。

「実技で一番つていうのは伊達じゃないんだな」

「それはどうも」

『透の空中 風 塵』

男は、不敵なという表現がぴつたりの笑みを浮かべながら、呪文を口にする。避けるか、受けるか。

『以つて我が手に巻き起これ アリス』

男は手を自分の真下に向けて撃つた。風の力で男の体が上へ浮かぶ。俺は目を細める。

『透の空気 雷 塵』

頭上から男の声がする。まずい。俺は口を開く。

『透の空中 飛 空 風』

『以つて我が手に进れ ワップラ』

『以つて我が身に舞い降りれ スイル』

体が宙に浮く。男の手の先から逃げる。俺が元いた地面へ、雷の塊が落ちた。

『透の空気 雷 塵』

俺は宙に浮いたまま、口を開く。男は目を見開いて、落ちていくままに俺を見上げる。

『以つて我が手に进れ』

俺は不敵に笑つた。

『ワップラ』

地面へ向けて、雷の呪文を撃つた。男の痛々しい悲鳴が上がる。直撃させなかつたのは俺なりの優しさだ。きっと濡れた地面が電気をよく通してくれたことだらう。男は地面に膝をつく。

『そこまで』

司祭の声が響く。男は防御壁の向こうの司祭を見る。

「先生、まだ終わつていません」

「膝をついたら負けだと言つただらう。試験でそんなに重体になられても困る」

男は何か言いたそうに司祭を見ていたが、浮いている俺を見上げた。「分かりました」

俺は地面に降りた。飛んでいるのはかなり疲れるのだ。クラスメイトから、拍手が起こつた。「またレオンが一番か。つまんないな」「でも飛べるんだから当然な気がするけど」スイル（飛行呪文）が使えるのは俺のささやかな自慢だ。努力の賜物だとは非、賞賛してほしい。

俺と男は防御壁の外に出る。男の足取りはおぼつかないが、命にはまったく別状はなさそうだ。

「それでは、今回の優勝者はレオン・マグダラスとする」

周りのクラスメイトから拍手が起こる。遠くにジークの姿を見つける。「やっぱりな」笑いながら、ジークの口はそう言つた。

全身に軽い疲労感を感じながら部屋に戻ると、ジークはいなかつた。そういえば選択授業があるのでした。今さつきの実技について感想やら意見を聞きたかったのに残念だ。

いつの間にか、雨が窓を激しく叩いている。景色は雨にじんで見えない。俺は窓際の勉強机に向かつた。机の上に積まれっぱなしの教科書の地層を発掘して、目当ての本を開く。

窓の外が光つた。重い物が落ちる鈍い音がして、窓に目を向ける。雷だろうか。けれど、変な音が、した。俺は窓を叩く雨の隙間から、外をのぞく。いつもの木と、薔薇以外に何か見える。部屋を出て、玄関で傘を取つて庭へ向かう。

雨の匂いの中に土の香りが濃くなつてくる。俺は足を止めた。

白薔薇の花壇の中、舗装された石畳の上に、人が倒れていた。銀色のおかっぱ頭に、白い肌、奇妙な赤い模様が入つた白い法衣、側に落ちた白い帽子。目は、閉じている。雨が白い肌を絶え間なく叩いている。近付こうとして、脚が震えているのに気付いた。傘に入る距離まで近付いて、人の側にしゃがみこむ。平坦な胸がゆっくり上下しているのを見て、体の力が半分抜けた。生きてはいる。ここまで来てしまつたからには、放つておく訳にはいかないだろう。傘を肩にかけて、恐ろしく顔立ちの可愛い少年の脚と背を抱えて持ち上げた。とても軽かつた。

廊下に水滴を落としながら部屋まで來たが、そのままベッドに寝かせる訳にはいかないことに気付く。少年を床に降ろして、自分のパジャマを持つてくる。サイズが絶対に合わないが、仕方ないだろう。自分の法衣に似た、模様の入つた白い服を脱がしていく。

首筋が熱くなつた。胸元の隠しボタンを外していった手が止まる。

少年は、胸のふくらみを白い布でぐるぐる巻きにした、女の子だ

つた。

「で、自分のベッドに寝かせた、と」

話を聞き終わったジークが言つ。窓の外は暗くなり始めているが、雨はやむ気配がない。女の子は一段ベッドの下の段で眠つたままだ。

「役得だつたな」

ジークは薄笑いを浮かべる。体が熱くなる。
「仕方ないだろ。びしょ濡れのまま寝かせればよかつたつていうのか？」

「冗談だつて」

ジークは笑つた。
顔を見た時点で、女の子だと気付くべきだったのだ。でも、どちらにしろ着替えさせなければいけなかつたと気付いて、変なジレンマに陥つた。

「このまま日が覚めなかつたら、どこで寝るの？」

「床で寝るからいい」

ジークはたいして興味がなさそつて「ふうん」と言つた。
「行き倒れかなあ。でも敷地内で、しかも女の子だしなあ」
確かに疑問はたくさんある。けれど、本人が日を覚まさないことは何も分からぬ。ここは女人禁制だから、あまり長くかくまっておく訳にもいかないし、俺とジークの精神衛生上もよろしくないし、何より俺はずつと床で寝るのは嫌だ。

ジークは椅子から立つて、女の子をのぞきこむ。

「あ、起きた」

俺は椅子から立ち上がる。女の子は驚く程の機敏さで上体を起こした。開いた目は、宝石のエメラルドに似ていた。パジャマはやつぱりぶかぶかで、俺は白い胸元から目をそらす。

「起きぬけに悪いんだけど、色々聞いてもいいかな」

ジークが言う。エメラルドの瞳が驚いたようにジークを見上げる。
「ジーク・フォンファイリア。こつちはレオン・マグダラス」

ジークは俺を指差す。エメラルドの瞳がはっきりと困惑する。

「君の名前は？」

『「」は、どこなの？』

女の子ははっきりと言った。ジークが「あらを見る。俺は女の子を見る。

「どこから来たの？」

ジークはもう一度尋ねる。女の子はジークを睨む。睨んでいる。確かに。

『言葉が分からない』

ジークは俺の方を向いて眉を寄せせる。

「まいったな。隣国のスパイか？ でもこんな女の子がなあ、ジークは自分で言つて、自分で可能性を否定する。とりあえず、この女の子が外国人なのは間違いないよつだ。

女の子は俺達から視線を外さず、ベッドから出てきた。気のせいかもしれないが、かすかな敵意を感じる。女の子は俺達を見ながら、部屋の中をゆっくり歩く。

「何か、誘拐犯と間違われてる？」

ジークが言つた。

「そうかもしれない」

「まいったな」

ジークは頭をかく。

「分かつた。少し落ち着こう。紅茶もうつてくる」

ジークは言葉をはさむ隙も「えず、扉を開けて部屋を出していく。女の子が、扉へ向かって走る。

「駄目だ、君は」

慌てて女の子の手首をつかむ。見開いたエメラルドの瞳と目が合う。エメラルドの瞳が、細くなる。

『ワープラ』

女の子の手首をつかんだ手に痛みが走り、声を上げた。女の子は扉を背にして、俺へ手の平を向けていた。

細められたエメラルドの目が、こちらを見ている。野生動物のようだと思った。動いたら殺される。けれどその瞳を、とても美しいと思つてしまつた。ライオンに殺される直前のシマウマは、この神々しさを感じて死んでいくのだろうか？

女の子が扉を振り返ると、扉が勢いよく開いた。女の子は痛そうな音と共に倒れて、悲鳴を上げた。

「ああ、ごめん」

ジークは何事もなかつたかのように、トレイを窓際の俺の机へ置いた。紅茶の香りで体の力が抜けて、膝をついた。全身に汗をかいていたことに気付く。女の子は涙目になりながら、俺と同じ体勢でこちらを睨んでいる。痛みを感じて手を見ると、赤く腫れていた。

「ほら、お茶にするぞ」

ジークは早速、ティーカップに紅茶を注いでいる。俺は立ち上がって、自分の椅子に体を預ける。

『透の地 回 時 気 以つて御身に降り積もれ ノゼリオ』

俺は自分の手に呪文をかけた。白い光が手を包む。痛みが少し引く。

「何でそんなに疲れてんの？」

ジークはミルクティーをかき混ぜている。

「ちょっと殺されそうになつた」

「脱がしたのがばれたから？」

「違う」

思わず大声で叫んでしまつた。ジークは笑う。

「ほら、君の分もあるから、おいでよ」

ジークは扉の側に立つてゐる女の子に声をかける。女の子はこちらを睨んでいる。ジークは紅茶をさしながら「紅茶、紅茶」と言い続ける。女の子はまったくこちらに来る気配がない。さつきは野生のライオンに見えたが、今は懐かない野良猫のようだ。

ジークは紅茶のカップを持つて、女の子に近付いていく。女の子が緊張したのが分かる。「はい」ジークは紅茶の入つたカップ

を差し出した。「飲みなよ。あつたまるから」女の子はジークから目をそらさず睨んだまま、カップを受け取ろうともしない。ジークは小さくうなつて、女の子に差し出した紅茶を一口飲んだ。

「ほら、何にも入つてないから」

女の子の前に、飲んだ紅茶のカップをしきつける。つわものだと思った。俺には真似できない。女の子は目線をジークから外さずに、渋々といった様子でカップを受け取つた。ジークは満足そうに笑つて、俺の元へ戻つてくる。

「おいでよ。立つてると疲れるだろ」

ジークは女の子に手招きした。言葉が通じないと云うのは、もうこの際どうでもいいのだろうか。女の子はカップを持ちながら、ゆっくりこちらへやつて来た。ジークの粘り勝ちだ。諦めなければ叶うこともあるのだと、何だか納得してしまつた。

「そりいえば椅子がなかつた。レオンの膝の上、じゃ駄目だよな

「馬鹿が」

ジークは小さな踏み台を持つてきて、自分の椅子を女の子にゆづつた。俺は少し冷めたストレートティーを飲んで、深く息をついた。女の子が紅茶を舌で舐める。毒見しているのかもしれないが、猫のようだ。「さて」ジークは紅茶を俺の机の上に置いた。

ジークは自分を指差して、「ジーク」と言つた。次に俺を指差して「レオン」。女の子を指差す。「君は?」女の子は紅茶のカップを両手で包んで膝の上へ置く。あまり乗り気ではなさそうだが、さつきより敵意は薄れている。

『アイネ・リルン』

「アイネ・リルン?」

復唱したジークに、女の子は頷く。言葉の壁は越えられるものなのかと、感心してしまつた。口の中で女の子の名前を呟くと、先程のシマウマ体験がフラッショバックした。

「そりいえば、何かやられた」

「何が?」

ジークは首をかしげる。

「お前が紅茶取りに行く時に、アイネが一緒に出ていこうとして引き止めたら、何か魔法？ を撃たれたような気がした」

「何の呪文？」

「詠唱してなかつたみたいだから、分からない」

ジークが重々しい顔をして口を開く。

「詠唱破棄ってことか？」

俺は頷いた。詠唱破棄は呪文の名前だけで呪文を発動させる技術で、高度な魔法センスと高い魔力が必要だ。現代人で習得しているのは、世界で指折りの魔術師だけだ。

「外国の魔術師なのか？」

ジークは俺とアイネを見る。当然、答えはない。

アイネの目が俺の机に向く。アイネは机の上に広げっぱなしになつている教科書を見ている。

『ワップラ、ギジュオ、ラルベルク。呪文表？』

『ワップラ、ギジュオ、ラルベルク。読めるのか？』

ジークと一緒に教科書をのぞきこむ。古代語で、現代呪文から古代呪文までが書いてある。

「古代語は読める、と。まあ魔法が使えるんなら当たり前か」

俺はアイネを見た。俺の中に生まれた可能性について聞いてみる。

「ラルベルク、できる？」

『ラルベルク？』

アイネは首をかしげて、可愛らしい声で言つ。『ラルベルク』俺は教科書の呪文表を指して、もう一度言つ。アイネは迷うように目を伏せる。やはり違うのだろうか。アイネは膝の上に置いていたカツプを、机の上に置いた。

『黒の空』

聞き慣れない古代語が耳に入つてくる。アイネは水をすくうように、両手を胸の前に出す。

『星 宙 塵 光 年月裂きて道筋露わに』

アイネの手の中が黒い光を帯びてくる。鼓動が速くなる。

『以つて頭へ降り注げ』

アイネは手を頭上へ掲げる。まるで、夜空に星をまくように。

『ラルベルク』

部屋の天井いつぱいに、黒い星空が広がる。息を飲んだ。ジークを見ると、同じように天井を見上げて、目を見開いている。果たして、答えは出たのだろうか？ ラルベルク（天体呪文／星）は古代呪文だ。現代人で使える者は、誰もいない。

アイネが頭上で手を振ると、天井の夜空は消える。俺はジークと顔を見合わせる。

ノックの音がして、心臓が飛び上がった。「隠れて」ジークがアイネを洗面所に押しこむ。俺は扉を開けて、心の中で舌打ちした。今日は妙な客が多い。

白い正装の法衣を着た、白い長い髪の、白髪の男性が立っていた。「どうされましたか、大司教」

この周辺一帯の教区を管理する責任者が、目の前に立っている。普段は式典などにしか姿を現さないのに。大司教はしわの中の目を細める。

「人を探していてな。どうやら少女がこの敷地内に紛れ込んでしまつたようだ。心当たりがあつたら教えてほしい」

確実にアイネのことだ。俺は答えていた。

「特には」

大司教は俺から視線を外す。

「誰かいたのかな。カツプが三つあるようだが」

大司教は薄く笑う。カツプまでは気が回らなかつた。鋭いじいさんだ。さすが大司教という位についているだけのことはある。

「クラスメイトと勉強していく、先程帰りました」

大司教は長い顎鬚をしごく。

「そうか。それならちょっと中を調べさせてもらえないか。知らないうちに潜んでいるかもしれないからな」

大司教が部屋の中に踏みこもうとする。ジークが扉の隙間を塞ぐように立つ。

「明日にしていただけませんか。ほら、雨も降りますし」意味が分からぬが、気持ちは分かる。体で大司教の進入を阻んでいると、洗面所の扉が開く音がした。

振り返ると、ぶかぶかのパジャマ姿のアイネが立っていた。

「観念したか

大司教が呟く。ジークは顔に手をあてる。

「さあ、来てもらおう」

大司教がアイネに近付く。アイネは大司教に手の平を向けた。冷たいエメラルドの瞳が大司教を見ている。大司教の足が止まる。大司教の手が、アイネに向けられる。

『透の空気 火 塵』

大司教が小さく呟いたのが聞こえた。アイネの指先が動く。

『アリス』

巻き起こつた突風に顔を覆う。何かがはためく音や、落ちる音がする。『詠唱破棄か』大司教が苦々しく言つたのが聞こえる。

『二一口』

大司教の悲鳴が聞こえる。風がやんて目を開くと、白い服と肌を焦がした大司教が倒れていた。アイネは倒れた大司教の上に手をかざしている。エメラルドの瞳は、細い。

『黒の空 星 宙 塵 光 年月裂きて道筋露わに』

アイネの手のまわりに、黒いもやが現れる。黒い呪文など、現代には存在しないのだ。

『以て頭に降り注げ』

「駄目だ」

飛び出していた。見開かれたエメラルドの瞳が見えた。

アイネをかくまつたのは、あそこで彼女を引き渡してしまつたら、眞実を知る機会が永遠に失われると思ったからだ。もつとも、アイネはおとなしく引き渡される気など、さらさらなかつたようだけれど

俺は呪文の終わりを聞かず、体の千切れる痛みで、意識を落としちゃった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7154x/>

ラヴィング

2011年10月19日08時16分発行